周山廃寺発掘調査現地説明会資料

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

2018年７月１日

所 在 地：京都市右京区京北周山町中山51番地ほか(周山中学校内)
調査期間：2018年４月９日～2018年９月14日(予定)
調査面積：約1420㎡

周山廃寺の位置

周山廃寺は、白鳳期(７世紀後半)に創建された古代寺院跡です。旧丹波国桑田郡にありますが、古代の丹波国の中心は桑田郡南西部(亀岡市周辺)にあり、国府推定地や観音芝廃寺・池尻廃寺などの古代寺院跡が集中しています。丹波国の中心地から離れた桑田郡北西部に寺院が造営された背景には、その立地に深い関係が考えられます。当地は、京都から若狭へ抜ける南北方向の街道と、亀岡から近江方面へ抜ける東西方向の街道が交差する、交通の要衝にあたります。

周山廃寺の発掘経緯

昭和22・24年、周山中学校建設工事に先立って、東京国立博物館の石田茂作氏によって初めて発掘調査が行われました。北から南へ延びる丘陵裾部で東堂・塔跡を、さらに西の１段高いところで西堂が確認されました。このうち東堂以外は建設工事によって失われたと考えられてきました。また、昭和55・56年には南西約１kmの地点で、周山廃寺の瓦を焼成した周山瓦窯の発掘調査が行われています。

調査成果

礎石建物(西堂)　昭和24年の発掘調査で見つかった６基の礎石を再確認しました。規模は東西２間(柱間2.1m)×南北２間以上(柱間1.8m)の礎石建物で、建物周囲には排水溝が巡ります。

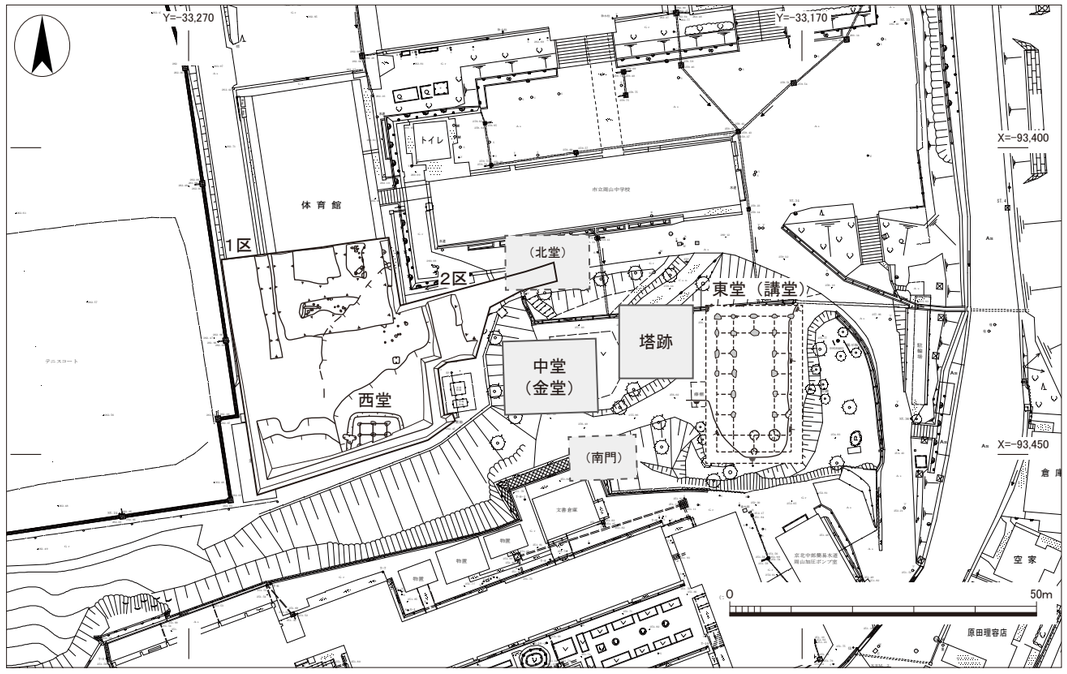
平坦面Ⅰ・瓦溜20　西堂北側のさらに一段高いところで、新たに平坦面が見つかり、その南斜面からは整理箱にして150箱を超える多量の白鳳期の瓦が出土しました。また、礎石と考えられる石も出土しています。出土状況から北西側から廃棄されたものとみられ、この平坦面Ⅰの西部にもう一つの建物が存在したことが推定されます。

土器溜２・３　平坦面Ⅰ南東斜面の樹木根両側で、江戸時代の土師器皿が計80点ほど見つかりました。江戸時代にこの辺りで行われた儀式などに使用されたものと考えられます。

まとめ

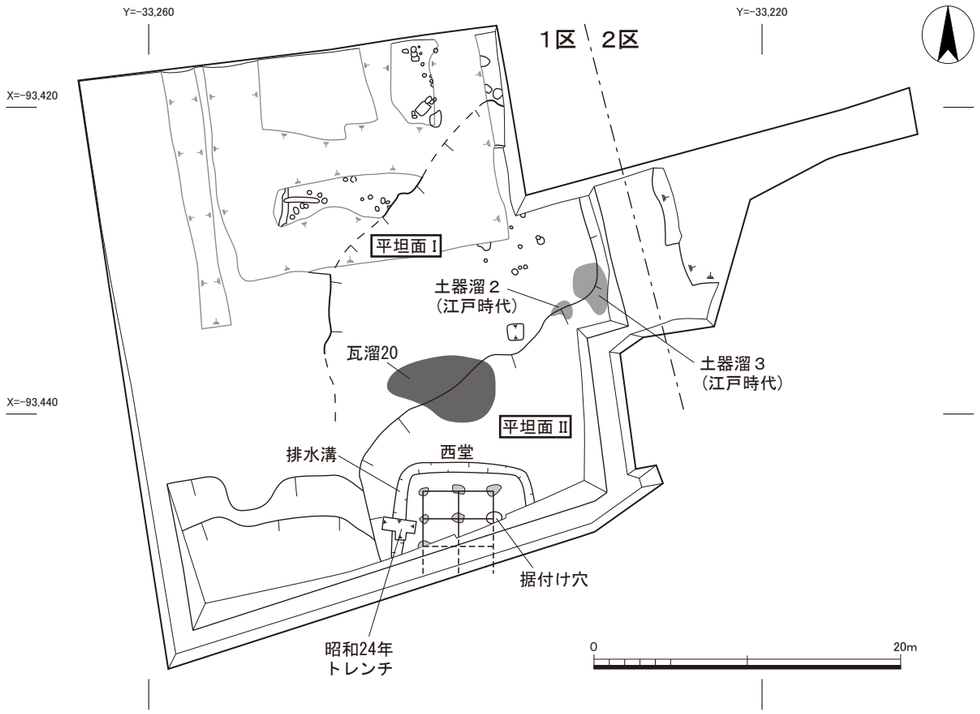
今回の発掘調査では、失われたと考えられていた西堂が地中に残っていたことが明らかになりました。西堂の規模は、東西が２間、南北は地形などから２間あるいは３間ほどの小型の建物であることが明らかとなりました。礎石の大きさや寺跡全体の位置から主要建物の一つとみられ、経蔵や宝蔵、鐘楼などの可能性が考えられます。また、新たな平坦面と瓦溜が見つかったことで、西堂の北側の一段高いところで瓦葺建物が存在したと考えられるようにもなりました。７世紀後半に創建された地方寺院は数多く存在しますが、周山廃寺のように多くの建物跡が確認されている例は少なく、この時期の地方寺院の在り方を知ることのできる重要な遺跡と言えます。

周山廃寺と周辺遺跡(1:50,000)

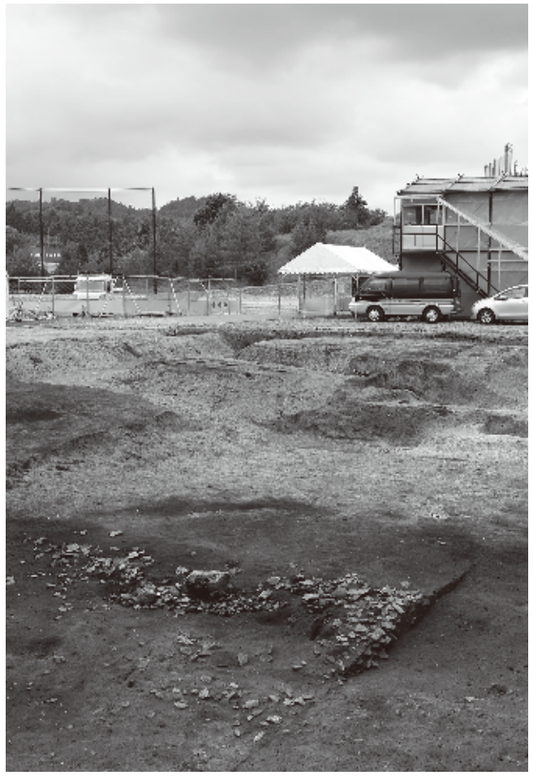


調査区配置図（1：1,000）

西堂（北から）



調査区略図（1：400）



瓦溜 20（南東から）

土器溜2・3（北東から）